史料集成

文学に表れた平泉文化の基礎的研究（その８）

―『封内名蹟史』に記された安倍・清原・奥州藤原氏と義経―

相原康二※

今回は近世の仙台藩編纂の地誌の一つの『封内名蹟志』に記述された安倍氏・清原氏：奥州藤原氏・源義経（関連する人物を含む）に関する伝承類を見てゆくこととした。底本には『仙臺叢書　第八巻』所収を用いた。

◇『封内名蹟志』解題

仙台藩官撰地誌の一つで、享保十五年（１７３０）、五代藩主吉村の命を受けた郡奉行の萱場高寿が、部下の佐藤信要（さとう・のぶあき）に編纂を命じて、寛保元年（１７４１）に完成した。

藩内の神社・仏閣、古城、旧跡、地名、地理、風景などを記している。著者も藩の役人であるので、民政に役立てようとの意図（治具の要典とする）もあった。

編集の過程で『奥羽観蹟聞老志』に基づいて調査・点検を行い、その誤りを正していったため、『聞老志』の改訂版ともいうことができる。

佐藤は『聞老志』の著者の佐久間義和の門人であり、佐久間に相談しながら編集を進めたが、完成前に佐久間が没したため、それ以降は高橋以敬（玉斎・与右衛門）の指導を仰いで文を整えた。

なお、佐久間と高橋は仙台藩の儒者遊佐木斉の同門で、兄弟弟子の関係であった。

◇参考　仙台藩の地誌類編纂事業

仙台藩は多くの地誌類を編纂させたが、その概要を紹介する。

①『奥羽観蹟聞老志』―四代藩主伊達綱村の命を受けた佐久間洞巌（義和）が編纂した。享保四年（１７１９）の序文を見ると、洞巌は受命後ただちに領内各地を巡歴して作成を開始したが、宝永四年（１７０７）作成した資料を焼失したため、同七年（１７１０）に再び稿を起し、享保四年に一八巻として完成させた。

内容は国郡洲県略考・官使類・故事類・庸貢土産類・名蹟類・名勝類・故事類・遺事類・東遊類などから構成されるが、名所旧跡・神社仏閣・山川奇勝を古今の和歌や物語・民話・伝説によって説明しており、歴史的記述を重視している。藩主綱村の開化主義・教養主義を反映したものであろ

うが、その後の類書に大きな影響を与えた著作である。

②『封内名蹟志』―上述のとおり。

③『封内風土記』―歴史記述的な名所旧跡志と治具の要典的な記述の両者の総合を目指して編纂された。宝暦一三年（１７６３）、藩命を受けた田辺希文が、９年間を要して明和九年（１７７２）に完成させた。

全二二巻（二五冊）からなり、巻一～二では封域・封候・風俗・土産・府城など、仙台藩に関わる総論、及び仙台城下について記述し、巻三以下に領内各郡村の詳細を記している。

先行した二書の総合を目指した意図は認められるが、実態は名所旧跡志的な色彩が強く、『聞老志』の影響を脱していない。しかし、その膨大な調査項目は、次に編纂された『風土記御用書出』作成の際の参考になったと思われる。

なお、『封内風土記』完成後、希文はその子希元に命じて『風土記拾遺』を編纂させようとしたが実現されなかった。

④『風土記御用書出』（安永風土記）―文字通りの治具の要典として活用することを目指して、安永二年（１７７３）から同九年（１７８０）にかけて編纂された。領内各村の肝入に村内の現況を調査・提出させたもので、『寺院書出』や『古人書出』なども同時に提出させている。

記載項目は「村名の由来」以下広汎に及び、「御案当本文四拾壹箇条附ヶ条四ヶ条都合四拾五ヶ条」にものぼっている。治具の要典を目的にしてはいたが、その編纂自体は一種の一大文化事業ともいうべきで、『聞老志』以来の伝統がそれを可能にしたのであろう。

なお、『気仙風土草』『胆沢風土聞誌』などの郡規模単位の地誌類を編纂された。

◇封内名蹟志巻第一　刈田郡

▽越河村（現宮城県白石市越河（こすごう））

＊亀井幽泉―（上略）義經東行亀井亦從。疲勞及渇飲此岩泉而忘其渇去。

▽斎川村（現白石市斎川（さいかわ））

＊古将堂―郷俗曰之越王堂。坂東有叢祠。中二女影。身著戎衣頭戴烏帽子。右執弓矢左提刀劔（中略）如今所祭二女。佐藤次信・忠信婦也。俱順孝于舅姑。侘時兩夫嬰疫疾。舅姑憂之。祈生叢祠病忽愈。後人感平日純孝貞潔。建二女廟。以為刈田麿脇護神。乃其遺像之也（下略）

▽犬卒都婆村（現白石市白川犬卒塔婆（いぬそとば））

＊片桐明神―大町村境。相傳。往昔瘞安倍頼時季子白鳥八郎行任屍。仍後人建祠祀之。其祠今已亡（下略）

▽中目村（現白石市大平中目（なかのめ））

＊泰衡城址―泰衡假館。後結城七郎朝光居焉。有廢池郷俗曰泰衡池。

▽圓田村（現蔵王町円田（えんだ））

＊花楯城―佐藤荘司叔父河邉太郎高綱。後世小原善閑者居焉。

＊築館城―郷人曰佐藤太郎居城也。太郎乃河邉太郎高綱之事也。近年砂子又七郎者居之。

◇封内名蹟志巻第二　柴田郡

▽沼邊村（現村田町沼辺（ぬまべ））

＊戰士塚―距韮神宿南三十餘町。墳墓累々是乃文治之役。士卒戰死之地。以其多而呼曰之千塚。今也半為野田。

▽平（たいら）村（現大河原町金ケ瀬）

＊獲馬田（ムマトリヌマ）―在大高社地四丁餘北皐山下疇田　水田深處往昔國衡没馬而所獲之地也。土人曰之馬取沼（下略）

▽福田村（現大河原町福田（ふくだ））

＊國衡塚―是亦在社西畔相去る事三丁餘にして塚有。是國衡討るゝの地也。後人一堆の墓となして稱其地。

▽船迫村（現柴田町船迫（ふなばさま））

＊船迫驛―東史曰。文治五年八月十一日。幕下次此驛。畠山重忠献錦戸國衡首。幕下殊賞其功（下略）

▽村田郷（現村田町村田（むらた））

＊村田白鳥神社―驛北三町餘に有。社の南に寺あり。大宮山定龍寺といふ。寺僧釋寛所藏縁記に曰。「（上略）往昔　源義家。從父頼義東征。詣于宮社而寝于神前。忽二甲士佩雄劔執弓矢左右手。白衣冠。自言是乃日本武尊。左右乃大津武日命宿禰吉備武彦命也。宣以神德而加于士卒兵威也。父子稽首再拜。明日軍中有白鶴一雙白鳥一翼。而飛翔于旗旄之上矣。官兵張兵機遂斃逆徒。其際接兵危急。則藤蔓化龍蜒々追。敵兵敗走退。仍康平六年癸卯。頼義新經營宮社以賽于神明。後人呼藤蔓曰之龍藤。

▽今宿村（現川崎町今宿（いましゅく））

＊八幡太郎窟（ヨシイヘノイハヤ）―（上略）（憂思山の山下）其下巌洞有る。相傳ふ。往昔八幡太郎義家朝臣東征の時。經廻此地忽暴雨に逢。是を岩下の古窟に避く。其跡今猶存ず。後人是を八幡窟と云。義家の武毅勇敢古今に冠たり。戎狄其名を聞て益惧。武威之英名也。

＊薩埵坂―関山の悲閣の南二町餘。石佛の地藏を立つ。故に地藏坂と云。其西を薩埵が原と云。最上領なり。此佛もと地府に有て。克眞路を導き。夭殤を救ふ。故に立于此。經歴の客砕細石を拾ふて是に手向けてすぐ。左の方地曠濶平遠是を蓬平といふ。古詩に所謂原野蓬生古戦場。馬首西來知是誰と云るに似たる地也。則奥羽の封彊なり。（註　大關、有耶無耶関、篠谷峠という）東史曰。文治五年八月十日。大木戸戦敗。主將國衡欲踰大關山而之于出羽。此關山也。又同六年正月。泰衡家臣大河次郎兼任。欲川北秋田城踰大關山。赴多賀國府而到于鎌倉焉。出於秋田城臨志賀渡。履氷而往時。堅氷倏泮溺死者五千餘人（下略）

◇封内名蹟志巻第三　伊具郡

▽高倉村（現角田市高倉（たかくら））

＊高藏寺―（上略）寺中上梁の文を藏す（中略）其書に曰。嵯峨帝御宇弘仁十年己辛伽藍新造。德逸（德一）處立也。治承三年丁酉五月。加修理爾後國司秀衡妻女新其廃壊。自此來國司北畠大納言入道。建武二年乙亥。依國宣高藏寺修造已成。此間文字大半消滅す（下略）

▽耕谷村（現丸森町耕野（こうや））

＊猴超（サルハネ）―此地阿武隈川の流にして。狭窄峻聳其傍に岩洞あり。山王窟といふ。上古伊達領靈山の神。山王と相知れり。其使獼猴をして此地に往來し。群猴相引て兩岸を超ゆ。依て是を獼猴超といふ。古昔阿倍貞任此川に止って。其敵を防ぐの地なり。

▽岡村（角田市岡（おか））

＊佐藤氏墓―是則次信忠信兄弟の古墓也。

▽松掛（まつかけ）村（丸森町舘矢間）

＊的石山―村中一山あり。石巖魏然として。石面布的を張るごとし。是乃往昔義家朝臣東征の時。丸森の山頭に登り。一石巖を射給ふ。人是を的石といふ。郷を的掛村といふ。後世其語の近きにより。文字を謬り松掛村と云。

◇封内名蹟志巻第四　宇多郡。或作字太。該当事項なし。

◇封内名蹟志巻第五　亘理郡

▽鹿島（かしま）村（現亘理町逢隈）

＊鳥海濱（トリノウミ）―荒濱の南にして。大畑濱・長瀞濱・高屋村・鳥屋崎濱・高須賀村・箱根田濱等。其水汀に近し。左右の長汀裂松相連る（中略）土人云。鳥海彌三郎此地に産也と。故に此名有といふ。**いぶかし。彼は。羽州鳥海山下の人。後人附會して爰に傳ふのみ。柳澤の事實に於ても又然り。聞人折衷せよ。**

▽田澤（たざわ）村（現亘理町逢隈）

＊柳澤―相傳ふ。寛治の頃。義家朝臣。金澤城攻の時。鎌倉權五郎平景政。先登に進み。鳥海彌三郎に左眼を射らる。人に語て言。其仇を復さずしては。此矢を不可抽と。遂にその敵を僵して。後鏃を澤中に棄つ。乃其地を矢抽澤と云。後人叢祠を建て景政を祀る。是を五郎の宮と云。又五郎權現と稱す。景政の佳名所として。其功跡を稱する事可貴。柳澤の文字も又矢抽の訓音を誤るか。**是等の事。皆羽州の事に附會する事。分明なり。**

＊阿武隈川（あぶくまがわ）武字於和哥則音清。於方言則音濁る。）―河源下野奈須の嶽を出て。岳の麓瀑布に濫觴す。林中に老熊あり。會津・白河・伊具・亘理の村落。尾山・田澤・名取の南長谷の數所を過て。荒濱の海に入る封内の大河（中略）按ずるに。源頼義朝臣。久く東征に劬勞するを以て。康平五年の春。高階經重をして代らしめ給ひしに。經重怯懦にして。甚だ貞任の兵威に恐れ。且國人頼義の仁惠に懐きて。經重に服せず。依て任に堪ずして京師に歸る（下略）

▽下郡（しもごおり）村（、現亘理町逢隈）

＊義家古館―郷説義家朝臣。貞任と兵を此地に接し時。軍利あらず。此館に據て兵を整。陣を營て攻之。或は鳥海彌三郎弟某が舊館と云。

◇封内名蹟志巻第六　名取郡

▽笠島村（現名取市愛島笠島（かさじま））

＊認鏃古杉（ヤタテノスギ）―道祖神の社西澤川に有。往昔秀衡上京の時。此地を過る時。路傍の老杉を射て。上京の首途を賀す。從者も各鋒鏑

をなす。明暦中迄は。其古杉猶存。圍一丈弐尺。後郷人商船の料になさんとて伐之。坎々として倒之。鳴動の聲隣郷に響く。割之は鏃多く出づ（中略）郷人是を天直杉と云。

＊東奥海道（アヅマ・カイドウ）（倭俗道路を呼て海道と云。白石先生海邊の分は。是を改正すべき由を云。然れども。世俗不用依而方言に従ふ）―右杉の下に細路有。是古昔東國通行の道也。郷人吾妻海道と云。

▽南長谷村（現岩沼市南長谷（みなみはせ））

＊應硯寺―千貫松嶺の北。武隈の西にあり。龍谷山應硯寺と號す（中略）康平中。頼義建之。長谷の佛像に換。岩窟山長谷寺と云。南北の村落は此寺號に據るといふ。

▽吉田村（現名取市高館吉田（よしだ））

＊高館の古城―秀衡の古壘といふ。或は頼朝東征次軍の地と云。東南秀衡丘有。上に熊野權現を祀る。乃那智の宮也（下略）

▽長袋村（現仙台市太白区秋保町長袋（ながふくろ））

＊靜の古墳―清水窪と云所にあり。是義經の寵妓靜が墓といふ。

◇封内名蹟志巻第七　宮城郡

▽国分荘（現仙台市青葉区国分町（こくぶんちょう））

＊仙臺府城―黄門政宗君。慶長五年庚子玉造郡磐手城より茲に移り給ひ。此城を築山に因て居館とす。往昔島津陸奥守茂ヶ城に居後此地に移る。文治年（中）結城亜七郎朝光居之（下略）

＊廣瀬川―濫觴は大倉村巨舟山を出熊臥村に至り名取新川の溪流と合ひ又名取川と合流して海に入城下を仙臺川といひ風土記に青葉川といふ。東吏（史）に文治五年水を名取廣湍に湛へて要害の地とすといふ是なり。

▽山榴ヶ岡（現仙台市宮城野区榴ヶ岡（つつじがおか））

＊釋迦堂―元禄八年。綱村君始て斯地を開き建堂。淨眼院殿護持の釋迦の像を安置す（中略）此地則古の鞭楯の城址是也（下略）

＊國分寺―學頭・院主・別當三宇を建設。金剛明護國山國分寺と號す。三宇の僧交々寺務を勤む。其屬坊二十四區あり。逐年祭祀の事を順行す。聖武帝天平中。諸州に詔して建る所の一寺也。其後鎮守府將軍藤原秀衡。甚だ佛法を信じ。寺院僧を建。頗る壯麗を極む。長堂廻廊を設けて尼寺に至る。其壯麗是に思ひ見るべし。其後傾倒荒廃す。矧や間兵燹の災にかかりしをや。今猶往昔の古瓦礎存せり。好事の者是を硯に彫て重寶とす（下略）

▽大倉村（現仙台市青葉区大倉（おおくら））

＊彌陀堂―（隔河流寺あり。極樂山西方寺と云ふ）―相傳。平重盛家臣筑後守貞吉。護持の像也。茶臼茶釜等を藏む。

▽根の白石村（現仙台市泉区根白石（ねのしろいし））

＊泉ヶ嶽―山岳の形勢府城の西北に跨る。峻極刈田の高岳と相低昂す。巖々として國府に甲たり。群山邊りに圍饒す。是を萱の平と云。又和泉が岳といふ。相傳ふ。往昔頼朝公東征の時。山下の河邊を過る時路傍に白壁在。是に倚て休息し給ひ。諸士の戰功を賞し給ふ。郷人其地を判在家と云。感状の朱印を與へられしによつてなり。是よりして根の城石と呼ぶ。往時の白巨石今已になし。

▽小泉村（現仙台市若林区南小泉（みなみこいずみ））

＊結城七郎館―天文中國分領主能登守又是に居る。

▽上谷刈村（現仙台市泉区七北田上谷刈（かみやがり））

＊長命山の城―山嶺更に他樹なし。唯青樅萬株枝聳へ。葉密にして直立棨戟を列ねしごとし。郷人長命山といふ。東史に所謂國府中山物見の岡と云是也。小山朝政同宗政同政朝。下河邊行平等。泰衡を茲に圍みて殘党を多く討破る。筑前坊良心と云者戰功あり。館北を伊谷澤原といふ。頼朝の陣所の址也

▽田子村（現仙台市宮城野区高砂田子（たご））

＊多湖浦島―福田の北なり。此地好芋を産す。味美にして名物と稱す。相傳ふ。頼朝東征の日茲に次軍すといふ。東史に見へず可疑（下略）

▽加瀬村（現宮城郡利府町加瀬（かせ））

＊龜井幽泉―寺有龜島山天祥寺と號す。膽澤左近將監家景の塋地也。今農家となる。其古墓もと寺中に有しを。今寺は墓を去る事三町斗に移せり。其東二町餘に。幽泉在龜井泉と云。是も古寺中の地なりしと云。

▽岩切邑（現仙台市宮城野区岩切（いわきり））

＊高森館―此地は。文治六年三月。頼朝。伊澤左近將監家景をして。奥州の留守に補す。宮城郡高森に居れり。則留守を以て氏とす。通國是を高森殿といふ。奥州留守たるを以。人皆高森と稱し高の國府といふ。

◇封内名蹟志巻第八　黒川郡　該当事項なし。

◇封内名蹟志巻第九　加美郡　該当事項なし。

◇封内名蹟志巻第十　玉造郡

▽鳴子（なるこ）村（現大崎市鳴子温泉町）

＊温泉神社―　斯地温泉あり。克瘡濕を治す。其北にあるを老婆温泉といふ。其地相傳ふ。往年義經公京を出て北行の時。夫人龜毀坂にて懐胎し給ひしを。辨慶是を笈の中へ入れ。負來りしに此地にて始て初聲を發せし故。行人其地を啼児と號す。郷俗是を轉じて鳴子といふ。温泉の神社今宮社なし。其跡のみ殘れり。

＊尿前（シトマヘ）―相傳ふ。往昔義經北行の時。夫人此跡にて大期に臨み。路旁に溺す。郷人其跡を地名とす。且奥羽の封境。是より行客往來す。岩手の城又此道路を経る故。又岩手の關と稱す。

▽葛岡村（現大崎市岩出山葛岡（くずおか））

＊葛岡城（葛岡は古の郡懸。文治の役畠山重忠此城に居る）―東史曰。文治五年九月二十日。葛岡の郡を畠山次郎重忠に賜とあり。後葛西兵衛此城に居る。或いは監物に作る。今村落となれり。

▽地点不明（葛岡村？（現大崎市岩出山上中里字葛岡？））

＊多賀（加）波之城（相傳ふ錦戸太郎國衡支援城なり）―東史曰。文治五年八月二十日。頼朝玉造郡に赴き。泰衡を多賀波々城に圍む。泰衡逃亡して殘兵降る。自是葛岡郡を過て平泉へ赴とあり。

▽上宮村（現大崎市岩出山池月上宮（かみみや））

＊荘司館―佐藤庄司が假館。其地小黒崎に近し。

▽下野目村（現大崎市岩出山下野目（しものめ））

＊照井城―秀衡家臣照井太郎高直居館也。

◇封内名蹟志巻第十一　志田郡

▽千石村（現大崎市松山町千石（せんごく））

＊松山城―往昔奥山出羽居館。後世茂庭氏の居館となる。文治年中。頼朝卿東征之時。此所を過給ふ。想ふに往昔軍士通行の道路なり。東史曰。文治五年八月廿一日。泰衡兵官兵を栗原三の迫にて拒むで于克。三浦介奥將若次郎・同九郎大夫を斬る。頼朝其甲兵を収めて松山路を經。栗原郡津久毛橋に到るとあり。

◇封内名蹟志巻第十二　遠田郡

▽村名なし―（現涌谷町箆岳神楽岡？）

＊箆宮權現―（箆峯大悲閣の）堂の西北にあり（中略）一説源義家朝臣東行。此所にて征矢を地上立。若此度の征討勝利を得ば。必根株を生ずべしと。果して根を生じ篁となり。其軍治平をなせり。後世宮社を建て箆篁宮と號し。其神應を以て山號とす。篁藪猶繁茂せり。社畔是往昔征矢を植し跡なりといふ。

◇封内名蹟志巻第十三　桃生郡

▽大田（おおた）村（現石巻市桃生町？）

＊日高見神社。神名帳に見ゆ。安倍貞任古館の邊にあり。相傳ふ。往昔貞任建る所にして。社地の廣八十間長九十餘間といふ。今喬樅・長槻・古松・老杉數十本を残すのみ。宮社なしといへども。土人毎歳九月十九日を例祭として。是を祀る（中略）

按るに。神名帳は六十九代醍醐帝（註、在位８９７～９３０）の時に出づ。然るに。貞任は七十代後冷泉帝（註、在位１０４５～６８）の時の人なり。時代あはず。始に其宮社を建べきや。貞任は夷賊反命の者也。何ぞ神を祀るにいたらんや。其古館に近きを以て。後人の附會せし事疑ふべからず。往年。社地の東南を穿しに。神鉾三支を得たり。尤古代の奇物なり。今是を東仙院といへるへ藏む。郷黨其社地を呼で日高見大明神といふ。

＊古戦場―日高の見社南に小丘あり。柏木原といふ。往昔八幡太郎義家朝臣貞任と接戦の地也といふ。今野田となれり。原の西に義家朝臣營陣の址あり。

＊反日壇　方四間ばかり同所にあり。―相傳ふ。義家朝臣貞任と兵を接へ給ひし時。戰已に互角なりしに。夕陽傾んとす。義家朝臣軍扇を以て日を麾しに。日是がために三舎を反す。其壇を麾日壇といひ。其地を麾日道といふ。虞公劔を以て日を指。魯陽戈を揮て日を反すと。異域本朝同日の談ばり（下略）

▽島越村（現石巻市北上町十三浜島越（しまのこし））

＊解鞍島―島にあらず。野外の高丘なり。郷説義家朝臣東征の時。鞍を解て樹下に憩ふ所なりと。其傍に石墳あり。高三間餘。土人是を墳島といふ或は岡島といふ。

▽樫崎村（現石巻市桃生町樫崎（かしざき））

＊樫崎館―山南に一樫樹あり。故に名とす。館主傳はらず。或曰往昔義家朝臣貞任と接戦の地なり。因て合戦崎といふ。然れども。義家貞任を此地に討事正史に見えず。前條に記せし高道夷賊と戦ひ死せし事を以て。時世征討の事實を誤りしものならんか。高道義家康平の役に先立事。百九十六年なるべし。

▽太田村（現石巻市桃生町太田（おおた））？

＊館山城―郷説。厨川次郎貞任古壘也。土人館崎の壘といふ。

＊八幡太郎館―義家次軍の地。其所を小池山館といふ。北の方五丁に柏木原あり。前條日高見の社下に詳なり。古戦場なり。

▽中野（なかの）村（現石巻市中町（なかまち））

＊七王館―葛西三朗清重居館。後石巻の城に移る。

▽和淵村（現石巻市和淵（かずぶち））

＊笈裏生柳―相傳ふ。往昔。義經東行の時。柳の條を笈の中に携ひ來り。此地にて志願を和淵の神に祈り。柳枝を地にさせり。爾後根を生じ枝葉年々に繁茂して鬱林になれり。其途七八十町の間。柳のみなり。今ある所五六千株。毎歳春時には翠色青々として甚だ佳なり。文人雅客の尤愛翫すべきの地なり。郷人笈入柳といふ。

▽小野本郷（東松島市小野（おの））

＊隆泉寺―往昔大窪村（現東松島市赤井）に有。無為山隆泉寺と號す。鎌倉權五郎景政の建立也。景政牌子あり。隆泉院殿興英大居士と稱す。文治三年丁未春。居城を小野本郷に移し。寺院も爰へ写す（中略）此地古昔の葛西の莊なり。

＊櫻樹館―相傳ふ。鎌倉權五郎景政の居館なり。

＊小野城　小野驛北にあり。―景政の末裔。長江太郎義景の居館也。文治年中。頼朝深谷郷を義景に賜ひ。其子孫綿々として長江播磨守勝景に至る（下略）

◇封内名蹟志巻第十四　牡鹿郡

▽蛇田村（現石巻市蛇田（へびた））

＊鳥屋神社―其山を鳥屋崎といふ。又石巻村に鳥屋神社と稱する有。相傳ふ。文治中。藤原秀衡の勸請する所にして。羽黒權現也。其山半ば石巻半ば蛇田に屬す。兩村共に鳥屋崎と稱するが故に。羽黒權現をも鳥屋神社と稱せり。

▽石巻村（現石巻市石巻（いしのまき））

＊羽黒社―後鳥羽帝。文治中。秀衡羽州羽黒神を爰に勸請せしといふ。

▽湊村（現石巻市湊町（みなとまち））

＊矢筈石―潭東の河畔細石多し。磊々として水汀に滿つ。相傳ふ。往昔義家東征の日。經歴の軍士箭を放って河伯を祭る。其箭石に化す。郷人是を矢筈石といふ。

▽大爪（瓜）村（現石巻市大瓜（おうり））

＊憩息（ヤスミ）石―農家の　陰に有。石色黄赤なり。相傳ふ八幡太郎義家東征の時休息する所の石也。郷黨休石といふ。其石今有所をしらず。

▽眞野村（現石巻市真野（まの））

＊眞野の萱原―寺あり。舍那山長谷寺と號す。山頭に大悲閣有。雲慶の作る所。本尊も又同作也。或云。秀衡長谷の觀音を移す。後平の三郎といへる者。頼朝の命により是を再興すと云。門前小池有。蘆葦皆片葉也。蘆葦を俗に萱といふ。故に古へより眞野の萱原と稱す。和歌に於て佳名あり。同名の地。摂津・大和・近江等にもあり（下略）

▽**門脇村**（現石巻市門脇（かどわき））

＊石巻城址　前條の日和山是なり。―葛西三朗清重。文治中。封ぜられる所の居城也。後裔世々相繼で。左京大夫晴信に至る。葛西郡と稱す。

▽**鮎川濱**（現石巻市鮎川浜（あゆかわはま））

＊神明社―天女堂（註、陸奥山の半ばにある）の南に有。是も海汀より七丁。秀衡の寄附せし大般若經一部を藏む。堂の東に愛宕の社有。嶺上なり。佛經を以て神明を汚す。神威あるべきや歎ずべし。

◇封内名蹟志巻第十五　栗原郡

郷黨一郡を五區に分つ。一の迫古の姫松の莊二十九村有。二の迫は古の尾松莊十四村有る。三の迫は高松の莊二十八村有。佐沼莊と稱する四村有。其餘十七村栗原と稱す。

▽**北方村**（現登米市迫町北方（きたかた））

＊佐沼城―相傳ふ。秀衡家臣。照井太郎高直故館といふ。

▽**一の迫莊**（現栗原市一迫（いちはさま））

＊大河兼任戰地　其地分明ならず。然れども。此莊内之内を出べからず。東史曰。文治六年二月十一日。泰衡舊臣下大河次郎兼任。征東軍監千葉新介と栗原一迫に戰ふ。兼任敗走し。殘兵五百餘を收て平泉に屯す。官兵進で衣川を襲ふ。兼任軍敗來神河川を渡て。素都の濱糟部に至り。鵜島舞（うとうまい）の梯に據る。重て上總の前司がために敗らる。是より花山千福山本を經て。龜山を越へ。又栗原の寺に潛居すと云。

▽**花山村**（現栗原市花山（はなやま））

＊花山城―相傳ふ。厨川次郎貞任。往時の居館館なり。郷人淵牛の館といふ。館下に川ありて。流れ河口村へ落。是を淵牛の瀧といふ。然るに郷人其名を傳へず。

▽**長崎**（ながさき）**村**（現栗原市一迫上中島ほか）

＊小坂本館―兩館あり。上館小坂本の館といふ。秀衡家臣長崎四郎故壘也。

▽**島驗**（體）**村**（現栗原市一迫嶋体（しまたい））

＊島體城―郷説狩野式部太輔居館。一説赤松館といふ。是佐藤庄司が長子次信の舊館也といふ。館下に寺あり。長水山吉祥寺と號す。佛像は安阿彌が作なり。寺名赤古墳あり。貞治二年三月三日とあり。姓名を記さず。按るに。貞治二年は。九十世。後光嚴帝十二年癸卯なり。

▽（二の迫）**八幡**（やはた）（栗原市栗駒稲屋敷ほか）

＊八幡社―此社は。桓武帝。延暦年中。田村丸の建立也。後冷泉帝。延喜中。八幡太郎義家朝臣。貞任・宗任征伐の時。其成功を祈り社邊に屯す。後全勝を得て。雄劔一口・甲冑・鋒鏑矢を納むといへり。古昔寺あり。小治山源東寺と號す。

義家の奉納せし所は。六十二筋の鍪兜。前三段垂篠。上履は菊花蔓藻錣（シコロ）正段ツキ。蔽（カシ）耳廣表。鍬形一尺二寸。金菊花を坐にす。頷下（ムナイタ）の廣さ八寸六分。長さ二寸胴一尺。草摺板九寸。菱縫の板。包むに革を以てす。栂檀板菊藻紺●縅札（ワリサネ）也。今一領は。筑前守といへるが納所。圍い六寸二分。錣五段。踈錣胸板八寸。其下も同じ。草摺八寸五分。八行一段。各其色を異にす。紅紺・緑紺・紫翠・碧。腰佩（ハイタテ）一尺六寸。長八尺五寸他。社中に納る所の舊物也。

鰐口一器是又舊物也。銘曰。小治山源東寺。円延慶四年壬亥正月五日。大旦那大麥生藤内次郎國正とあり。

按るに。延慶四年壬亥（１３１１）。九十四代花園帝。應長元年辛亥也。壬の字誤か。大麥生は姓氏か。郷れ郷農の長者なるべし。

▽片子澤村（栗原市栗駒片子沢（かたござわ））

＊鳥合神―相傳ふ。由理若自愛の鷹。緑丸の社新山權現と稱す。後人其鷹主の為に。溺死せしを哀れみて祭れりといふ。或は秀衡の建てし所也ともいへり。九月九日例祭なり、別當宅を鳥屋しきといふ。

▽鶯澤村（現栗原市鶯沢（うぐいすざわ））

＊秋保社―天喜五年。源義家東征の時。熊野三社を山上に建て祭る。秋七月落成す。始て禮典を備へ。秋法の二字を以て社號とす。蕭殺の事義に効ふ（下略）

▽栗原（くりはら）**村**（現栗原市栗駒原西沢）

＊栗原寺（りつげんじ）―今醫作山上品寺といふ。古の栗原寺是なり。東吏（史）曰。文治六年春。大河次郎兼任。栗原寺に潜居す。錦の脛巾を着。金作りの太刀を佩り。郷人是を怪み。三月十日樵夫數十人起て。其寺を圍み斧斤を以殺せり（中略）君子の曰。服之不衷（カナハ）身之災也と云り。兼任身轉客となり。猶錦を着金を佩く。宜なる哉。樵夫の害に値るをや。

▽梨崎村（現栗原市金成梨崎（なしざき））

＊腰掛石―（姉齒松の）松下の東南十二三歩に巨石有。石面紋理有て布の如し。往昔義經往還の時。石上に憩ひ旅懐を伸しと云。

＊黄雀池―（姉齒の）松を去ること四十餘間。東南の林中に小池有。是又義經東行此の池水を汲て。墨に研り家書を作るの地なりといふ。

▽姉齒村（現栗原市金成姉齒（あねは））

＊鷹羽清水―（姉齒の）松樹を去る事十九町。路傍の岩畔に有。義經經過の時。岩下を穿ちて。此水を湧出せしむと云ふ。

＊光景古館―（姉齒の）松樹南に有。泰衡家臣。姉齒の平治光景の古墟也。光景此地の地頭たり。故に其姓とす。館下の水田古の東奥街道也。

▽三の迫の荘（現栗原市三ノ迫（さんのはさま））

＊東史曰。文治五年秋。泰衡。若九郎太夫。余平六をして。栗原三の迫。黒岩口を一野邊に幕下頼朝を拒はましむ。

▽平形村（現栗原市金成津久毛平形（ひらかた））

＊津久毛橋―橋西は平形村。橋東は岩崎村。文治の古戰場なり。東史曰。文治五年八月二十一日。頼朝公松山道を經。津久毛橋に至る。時に梶原平次景隆。戯に和歌を献じて賀す。

陸奥の勢は味方につくも橋渡してかけん泰衡か首
頼朝喜べり。或上句は頼朝の作。景隆下區を賡と云。
＊江蒲藻山信樂寺―橋北に有。今荒廃して故跡のみ存せり。此地泰衡の戰場といふ。其所に石墳有。正應六年二月十日と記す。
＊十三壇―連架橋。北二十四五間に古館之趾あり。上に土壇十三堆を設けし所なり。南に相連れり。何之為にせしといふ事を知らず。或は此地。往昔の古戰場にして。戰死の骸を瘞めしなりとも云ふ。

▽岩が崎村（現栗原市栗駒岩ケ崎（いわがさき））
＊守夜壇（ねずのだん）―泰衡營陣の時。士卒夜を守もる所也。故寢壇と云ふ。郷人謝て鼠壇といふ。

▽沼倉村（現栗原市栗駒沼倉（ぬまくら））
＊義經墳墓―義經高館にて自殺の後。沼倉小次郎高次と云者。此地に葬り。陵墓を建。此地山上に高次が古館の跡あり。是を辨慶の峯といふ。往昔武藏坊逍遥の地なりといふ。
＊彌陀堂―仏像の背に記して曰。應永二年此堂を建つとあり。又義經の馬具を納む。今たゞ鐙のみ殘れり。又古笈あり。辨慶東行の時。負所の古物なり。中に金襴の袈裟を納む。堂邊に故礎あり。是往昔。八幡・菅神・愛宕・藥師・觀音等の。堂社の遺趾也といふ。

▽赤子村（現栗原市金成赤児（あかちご））
＊舞童墳―相傳ふ。往昔。秀衡歌舞を好み。舞童數十人を撰み。常に歌曲を庭に舞しめて樂とし。一少年春風と云ふあり。容貌閑麗にして技もまた羣児に秀て。歌へば行雲を歇め。舞へば紅袖を飄す。衆人是を愛稱し。其他を稱譽するものなし。群童是を惡み。人をして密に殺害し。死骸を茲に瘞む。常に好んで紅衣を着せしかば。個人此所を赤児村といふ。

▽小迫村（現栗原市金成小迫（おばさま））
＊白山社―上巳（じょうし）（旧暦の三月最初の巳の日）を以て例祭とし。毎年二月廿五日より。衆徒等勝大寺に於て斎戒し。上巳の日に至り。衆徒等勝大寺を出て行隊を作り。太鼓・銅鑼・螺具等を吹ならす。行々獅子を舞す。一人翁の假面を被り。幣を持て祝文を壇上に誦し。此間衆徒二人女服を着。靚妝の態を馬上に競ふ。是を老婆少女（モトメ・ウラメ）の禪と云ふ。又二人笛を壇上に吹き。二人長刀を取りて舞ふ。是を入振と云ふ。又二人扇を持て。共に壇上に舞ば。衆徒一同に歌聲を和す。是を飛舞と云ふ。舞終て扇を衆人の中に投げて去る。人爭ふて是を取る。又六人平家壇の浦合戰の状。並に奈須與一宗高。扇的を射るの形勢を馬上にてなせり。是又扇を稠人の中に投棄つ人爭奪ふ。又八人胡桃木を細く削りて籠に作り。其籠裡を朱にし表に畫をかき。剪栽花を籠上に植て。是を頭に戴き。鼓吹して舞蹈踴躍する事。數回に及て息む。是又其籠を衆人の中に投れば。是も爭奪ふ事初の如し。此の舞を稱して田樂といふ。是れ毎歳日の例也。

▽若柳村（現栗原市若柳（わかやなぎ））
＊馬籠―當所驛の南に有。往昔義家次軍の時。騎卒土窟を設て馬を養ふの所也。木戸脇に馬停の地あり。古下馬の地。
＊新山古館―當澤口にあり。古老の話に曰。大古此の山一夕の内に起出す。仍て新山あと云ふ。麓に河流有梁を架して福岡に通ぜり。今往時に異なり。相傳ふ。此山頭も又義家朝臣次軍之地也。（下略）

▽大原木村（現栗原市金成大原木（おおはらぎ））

＊重家館―鈴木三郎重家の古墟なりと云ひ傳ふ。今寺となり。尼我山喜泉院と號す。城考に曰。鈴木參河古館なり。又大原木城と號す。

◇封内名蹟志巻第十六　登米郡

▽上沼村（現登米市中田町上沼（うわぬま））

＊八幡社―後冷泉帝。治暦年中。源義家朝臣。東征の頃此所に次軍。治平の後建し所也。

◇封内名蹟志巻第十七　本吉郡

▽志津川村（現南三陸町志津川（しずがわ））

＊朝日館―郷説曰。此城乃秀衡第四子。本吉四郎古館なりしを。後世千葉大膳太夫重次居れり。古城考曰。本吉古館は。志津川西六丁に有。相傳。往時秀衡の四子。本吉四郎高衡。此地を領せり。仍居城とし葛西の時。千葉大膳太夫居之。

▽歌津村（現南三陸町歌津（うたつ））

＊田束嶺―（上略）相傳ふ。仁明帝。承和中。開く所にして。高倉帝の安元中。秀衡此山を尊信し。新たに堂宇を造立じ。僧舎頗多し。山上の寺を羽黒山清水寺といふ。本尊藥師佛弘法の作。中段の寺を。田束山寂光寺といふ。本尊彌陀佛にして天台宗なり。七堂伽藍甍をならべ。坊舎七十餘宇なり。本吉四郎高衡をして。祭祀を主らしむ。文治の役。泰衡・高衡共此山中に隠れ居りしが。終に官兵の為に討れ。遂に祭祀法事絶たりしを。其後葛西此所を領するに及びて。再興之（下略）

＊高遊嶺―田束の西南に峯あり。巒極峻嶺其地愛すべし。往昔貞任妓を携へ來りて。此の山に遊び遠望を稱せしといふ。後人貞任高遊嶺と稱し。左足山長川森といふ。何に據て名とするや詳ならず。

＊淨福寺―（佐藤）莊司夫婦の建つる所なり。寶壽山と號す。尼公の古墳あり。

▽津谷村（現気仙沼市本吉町津谷（つや））

＊佐藤氏古墳―寺あり。安養山淨勝寺といふ。本尊釋迦佛は湛慶の作にして。佐藤庄司妻建之也。馬籠・津谷の兩邑。古昔莊司が妻湯沐の地なりし故。寺院を建て一家の牌子を置り。其一は奥性勝信。文治五年八月四日七十五歳。二は光明院昌運。是莊司夫婦なり。三は吉祥院次信。文治元年二月十九日卅六歳。四は清光院忠信。文治二年九月廿二日卅四歳。寺中次信忠信の古墳なり。

按るに。此の牌子は後世の俗。附會僞作せしなるべし。次信は萬世の忠臣。主將の命に代って戰死せり。其日は元暦元年三月十九日。源平海陸の戰にて。児重（童）走卒といへども是をしれり。忠信も其後吉野にて。主に代って衆徒と戰ひ。其後京師にて自殺せり。事正史に詳にして。此兄弟の忠誠後世以て美談となせり。然るに。爰に記せし所は。年月皆謝れり。尤も遺憾といふべし。

＊御嶽―津谷・山田兩邑の境にあり。郷人藏王權現と稱し。山下に寺あり。金峰山金剛寺といふ。往昔莊司の老妻。芳野勝神に擬し祭れりといふ。

▽気仙沼本郷（（けせんぬま・ほんごう）（現気仙沼市本郷）

＊大悲閣―相傳ふ。義經。鬼一法眼息女の為に建る所なり。その佛像は行基の作にして。息女幼きより護持の像なりといふ。或は義經の護持

せしなりともいふ。寺あり。岸山觀音寺と號す。義經の牌子あり。

▽**新城**（しんじょう）**村**（現気仙沼市東新城）

＊平野八幡―義家朝臣東征の時。下野國平野八幡を此所に勸請セ氏所也。郷人兩社八幡と稱す。

▽**月館**（つきだて）**村**（現気仙沼市新月）

＊陣森―義家朝臣陣營の所也。又山南岩上に。彌陀の像を彫る所あり。

▽**御崎**（おさき）**の地**（現気仙沼市唐桑町崎浜）

＊梶原堂―石濱にあり。建保五年十二月二十四日。鎌倉若宮の僧東遊建る所也。小影あり。中頼朝左右は梶原父子の畫像なり。建保は順徳帝の七年内子に當れり。

▽**鹿折**（ししおり）**村**（現気仙沼市中みなと町）

＊信夫館―郷黨忍の字に作る誤なり。相傳ふ。佐藤莊司の假館也といふ。是本館の地名を擬し呼ぶなるべし。館下に温泉あり。郷説後來鹿折信濃居之。城考記には。熊谷信濃といふ。同名の古壘に小泉の西北馬籠村にあり。是又莊司の館といふ。參考すべし。

◇封内名蹟志巻第十八　磐井郡

▽**五串**（いつくし）**村**（現一関市厳美町（げんびちょう））

＊磐井川―是古の磐井河今一ノ關川といふ。水源駒ヶ嶽より出づ。後冷泉帝。康平五年癸卯九月五日。阿部（安倍）貞任精兵八千を以て。官兵と小松の柵」に戰ふ。衣川の北なり。源義家義綱等奮戰最甚しく。午より酉に至る。貞任遂に敗れて磐井川に退く。武則精兵八百を以て是を追討。且鋭兵五十人をして。潛かに貞任が軍に入置。火を擧て相圖とし。急に是を擊しかば。貞任が兵大に擾乱し。自ら蹂躪す。武則頻りに追て。高梨宿より衣川關に至。其間僵死の敵兵麻を亂せる如し。貞任遁れて衣川城に入る（下略）

＊衣川―（上略）古は磐井郡なりしが。今伊澤軍に屬せり。然れども衣川館の事實當郡にあり。且衣關も又茲にあり。故に此郡中に載す。參考すべし（下略）

＊衣郷―即此の村落所謂衣脇郷也。或は參河國ともいふ。

▽**下黒澤**（しもくろさわ）**村**（現一関市萩荘）

＊隊峰　一臺峰に作る。―往昔泰衡陣を張りて。官兵と相戰ひし地なり。後人知る者少なし。

▽**平泉村**（現平泉町平泉（ひらいずみ））

＊衣川館　往昔の舊地。凡例表に違ふと雖も。爰に記す。平泉村に有。今是を高館といふ。往昔阿部（安倍）貞任が父頼時の築く所にして。是を衣川館といふ。文治中。民部少輔基成此館に居れり。後判官義經が社を建て。其征箭を祭れり。是を剡矢神と稱す。郷黨方言に因て。矢越山明神と云ふ。此地又何人か空海作の觀音を以て。是に易たり。

＊羽山權現―是又其神不詳。文德帝。仁壽三年癸酉建る所也。或は義家兩社を經營せし共いへり。是又慈覺作藥師佛を安置せり。

▽**澁民村**（現一関市大東町渋民（しぶたみ））

＊觀音堂―阿陀有頂山と號す。相傳ふ。工藤祐經子犬房丸の建立といへり。或は秀衡の建立ともいふ。運慶作の觀音像。春日の作文殊像を藏

す。厨子の上に。建武二年としるせり。然れば此時再興をなして記せし床r歩なるべし。

▽大原村（現一関市大東町大原（おおはら））

＊八幡社―後冷泉帝。治暦年中。義家朝臣東征の時。城州岩清水を勸請して建る所也。是にも湛慶作の彌陀像を置けり。寺あり。慈照山八幡寺といふ。

▽千廐村（現一関市千廐町千廐（せんまや））

＊千廐舊址―千廐驛を去る事十二町餘。河畔に石を疊て馬窟とせり。廣さ一間餘高さ一丈餘。其邊は秀衡廐屋の迹なり。相傳ふ。秀衡往昔馬を此所に飼置しに。其數千匹に及べり。故に此名とす。

▽清水村（現一関市花泉町金沢清水（しみず））

＊花流泉―相傳ふ。是秀衡煮茶の泉也と。其清水冷寒にして。甘美尤愛すべし。且岩上に花樹ありて。香水風花を吹く。淺湲皆紅と變ぜり。仍て流紅泉とも稱せい。兩名ともに風雅の泉名といふべし。又金沢村の中にも。大小の清泉あり。是又秀衡の茶泉なりといふ。

▽金沢村（現一関市花泉町金沢（かざわ））

＊大門地藏權現―此號尤怪しむべし。相傳ふ。秀衡の建る所也といへり。稱號によりて考ふるに。是又浮屠役徒の附會せしものなるべし。社中に。地藏・多門・廣目の二天。水月勸音を安置せり。共に雲慶の作なり。二天元を門に安置せしが。今其門廢して社中に置り。其門址を仁王原と呼り。

◇封内名蹟志巻第十九　膽澤郡

▽八幡（やはた）村（現奥州市水沢佐倉河（さくらかわ））

＊鎮守府八幡―平城帝。大同年中。田村麿建營也。往昔弓矢・鞭策等。今已亡。存する所は。雄劔一振。長一尺。又檀金の彌陀一軀あり。傳いふ。是頼朝護持の像なりと。縁起あれども取るに足らず。

東史曰。文治五年九月廿一日。頼朝自厨川之平泉。路經膽澤郡鎮守府。於是親奉幣八幡宮。號第二殿。瑞籬。是田村麿東夷征伐下向時。所勸請崇仰之靈廟也。彼卿所帶弓箭及鞭策納之寶庫。仍殊欽仰。向來可被禱泰平云。

▽相去（あいさり）驛頭（現北上市相去町）

＊文覺墓―傳へ云。高雄の文覺。東行斯地に寂せりと。未詳來由。但今遠藤氏の家傳へ云。遠藤武者盛遠の後裔也といふ。其佩刀及び法螺貝を家藏とせり。是文覺より授業し物なりといふ。

▽塩釜（しおがま）村（現奥州市水沢水沢町（みずさわちょう））

＊日高妙見―鄕説に曰。嵯峨帝。弘仁三年の建立なり。後源頼義藤原秀衡等の再建なりといふ。中珍藏の者多し。一は本尊佛　唐工　脇侍乃韋駄天・摩利支天。二は十七佛。空海作。三は聖德子の像　自作。四は大日畫像。聖德太子親筆。五は心經。空海書。六は墨繪觀音。牧溪。七は翁面。慈覺の作。八は彌陀畫像。惠心筆。九は不動畫像。光行筆。十は鷺畫。雪村筆。十一は林泉の圖。雪舟古法眼元信の筆。十二は黄魯公眞書。十三は茶碗。茶臺。共に高麗燒。十四は螭龍之角。十五は蟒之牙。以上什寶。今多寶院といへる。修驗是を司さとる。

▽上衣川（かみ・ころもかわ）村（現奥州市衣川上衣川）

＊衣川城―往昔は。此地磐井郡に屬せし故。舊事實和歌には磐井郡の部に出せり。

＊衣瀑布―高さ一丈二尺。廣さ十三間餘。奔流雷のごとく。碧潭藍を染むる如し（下略）

▽下衣川（しも・ころもかわ）村（現奥州市衣川下衣川）

＊吉次故宅―衣川の北に有。舊礎今猶存せり。吉次は奥州の大賈にして。往昔京師に有し日。牛若丸に鞍馬寺にて面會し。潛かに東行を約して。奥州に伴ひ來り。秀衡に謁せしむ。秀衡大に喜び。是れを稱して第宅を此所にて與ふ。是其舊宅の遺趾なり。

＊雲際寺―牛　山と號す。仁明帝。嘉祥中。釋巨岳の開く所也。今妙高山と改む。寺中義經の牌子あり。義經通山公といふ。

＊小松館―衣瀑布近畔に有。永承役。貞任叔父官照の守る所の城趾也。康平五年八月。源頼義將兵を七隊に分て。小松の柵を攻む。其兵は武貞・貞頼亦秀武・頼貞：武則・武忠・武士道等也。深江是則・大友員季敢死の兵二千を率ひ。宗任の八百騎と戰ふ。官兵殆危かりしに。清原武道奇計を以て。迎擊大に敗之。頼義逃るを追ふて。小松柵を抜く。九月貞任官兵を伺ひ。精兵八千を率て小松柵を攻む。武則能戰ふて是を敗る。貞任衣川に走れり。

▽白鳥村（現奥州市前沢白鳥（しろとり））

＊輝井高直陣營趾―衣川の西白虎山にあり。泰衡の家臣輝井高直張陣の地也。

＊白鳥故館―安部（安倍）頼時の八子。白鳥行任居館也。天正中中岩伊賀守居之。

◇封内名蹟志巻第二十　江刺郡

▽片岡（かたおか）村（現奥州市江刺岩谷堂（いわやどう））

＊巖谷堂毘沙門―岩屋戸山多門寺といふ寺あり。開基斧斤共に慈覺の建造也。寺中鈴木三郎重家の笈を藏す。

＊重染寺―醫王山と號す。鈴木三郎子重染といへるが。父の為に建立せしと云ふ。鄕人其所の山を重染山といふ。

＊古戰場―康平中。官兵屯を構ひ。兵を接すしの地なりといふ。然れども其事實傳はらず。

▽餅田村（現奥州市江刺岩谷堂餅田（もちた））

＊白旗池―源頼義。往昔白旗を立て。征馬此池を飼ひしといふ。今池涸て僅の小池のみ存してあり。此地を西山宅といふ。

＊高水寺趾―鄕黨今此所に諏訪明神を建つ。東史に曰。頼朝卿逗留蜂社。其邊寺あり。高水寺といふ。稱德帝勅願所にして。一丈觀自在菩薩あり。鎮守は走湯權現。道祖神の小社は清衡の勸請せし所也。幕下拜禮を遂給へ。社後を見給ふに。大樹の槻なり。是を祝して鏑箭を放ちて還給ふ。

＊豐田古館―其地東西五十七間。南北三十九間。是安部（安倍）頼時の婿。亘理權太夫經清居城也。經清戰死し其子清衡僅に二歳。母と同じく虜となれり。頼義是れを清原眞人武則に再縁せしめ。後二子を生む。武衡家衡是なり。異父同母の兄弟也。是より先。武則荒川太郎武貞をして家を繼しむ。武則此度功により。奥羽の探題職に補せらる。武貞は其子眞人貞衡共に荒川の家を繼ぐ。武衡・家衡其甥貞衡を恨み。仙北金澤城に據て叛せり。義家朝臣勅を奉じて。貞衡等と共に攻之。其子

小太郎成衡。此の戰に死せり。武則は兩國の守護職を清衡に譲り。是より先既に死せり。清衡異父の武衡家衡の不軌を惡みて。是に與せずして官軍に屬せり。義家朝臣是を感賞し給ひ。朝廷に奏問を遂げ。奥六郡を以て清衡を封ず。實父の故墟なるを以て此城に居れり。後平泉に移りて三代の間此城を守り。奥羽兩國の守護たりしが。泰衡至て其家斷滅せり。

（中略）

按るに。江刺郡は。他郡に比すれば。郡内尤狹し。然るに堂舍寺院慈覺の開基地十餘區。其餘他邦他郡等に數ふるにいとまあらず。其自彫刻せし佛像・堂宇等。是又少なからず。いかんぞ一人力にて。かくなせし事を得べけんや。是徒弟又は他僧のなせしをも。其信を増んがために。後人の附會せしものまるかしるべからず。識者詳かに是を辨ぜよ。

◇封内名蹟志巻第二十一　気仙郡　該当事項なし。

※　岩手大学平泉文化研究センター客員教授